Bulletin of the Educational Research and Development, Faculty of Education, Kagoshima University
2016, Vol.25, 71-76

論 文

スポーツ組織の理念にみるスポーツ教育思想の形成過程
－森（山下）徳治とカール・ディームの共鳴関係－

武　隈　　晃［鹿児島大学教育学系（保健体育）］

The sport educational thoughts in the philosophy of sport organization

TAKEKUMA Akira

キーワード：スポーツ教育思想、森（山下）徳治、カール・ディーム、スポーツ組織の理念、日本スポーツ少年団

はじめに

本稿はスポーツ教育思想の形成過程における二人の使徒､森（山下）徳治（1892-1965）とカール･ディーム（Carl Diem：1882-1962）[1] の共鳴関係について論じることを目的とする。

オリンピックの東京開催を２年後に控えた1962年にオリンピック・ムーブメントの理念を達成するための恒久的組織として発足した「日本スポーツ少年団（Japan Junior Sports Clubs Association）」の哲理・理念の形成過程を分析する中で、筆者らは既にいくつかの注目すべき教育思想について言及している。[2] それはカール・ディームのスポーツ思想と森（山下）徳治の教育思想の果たした役割の大きさを浮かび上がらせたが、相互の影響過程にまでさらに踏み込んだ検討を要請するものとなった。

“Carl Diem Sachakten SACHAKTENVERZEICHNIS”（Carl Diem の年次別文書リスト）[3] によれば、カール・ディームの1929年、1955年、1961年の訪日やそれらを契機とした日本人研究者等との関係に関わる記録がファイリングされている。また、2013年３月に鹿児島大学に寄贈された「山下（森）徳治文書」[4] には多数の原稿・冊子類、ノート類、洋書類とともに、カール・ディームの書簡など、両者の交誼を確認できる資料が含まれている。これらを手がかりに、本稿では「スポーツ少年団の哲理･理念」を起草した森徳治[5] の手になるスポーツ教育思想、とりわけ「スポーツ生活」や「自己形成」などの概念定立の背景にカール・ディームと森との共鳴関係があったことを示すとともに、それを傍証する両者の影響過程を洞察する。

１．1955年　カール・ディーム来日

Carl Diem Sachakten [6] によればカール・ディームは1955年の日本講演旅行以降、日本人研究者等との書簡のやり取りが始まったことが記録されている。それらには東京オリンピック日本選手団団長で日本スポーツ少年団の創設を主導した大島鎌吉、ドイツ在住の日本人医師赤池陽らとともに森徳治の名前が挙げられている。Bericht　Über die

[1] カール・ディームは1936年のベルリン・オリンピック大会組織委員会事務総長を務め、1947年から62年までケルンスポーツ大学の初代学長の職にあった。また、ドイツ・スポーツユーゲント（Deutsche Sport Jugend）結成に尽力するとともに，「ドイツ連邦青少年競技（Die Bundesjugendspiele）を計画し、戦後のドイツ青少年教育に積極的に取り組んだ。1955年にはスポーツ施設建設十年計画を発表し、後の「ゴールデン・プラン」（Goldner Plan）としての連邦的規模の運動に進展」[19] させた。

[2] 武隈　晃・前田晶子、「日本スポーツ少年団の哲理・理念」における教育思想の形成過程、『鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要』、第24巻、pp.59-69

[3] ケルンスポーツ大学スポーツ史学科長で同大学オリンピック研究センター研究部門長のStephan Wassong教授による提供資料
“Carl Diem Sachakten SACHAKTENVERZEICHNIS”
全445頁、索引全77頁及び補遺からなる。

[4] 前田晶子、「山下（森）徳治文書」（鹿児島大学）の概要とその性格、『鹿児島大学教育学部研究紀要』、第66巻、2015年、pp.97-109

[5] 教育学・教育史研究の対象としては旧姓の山下がしばしば用いられるが、本稿では「草案」執筆時の「森徳治」とし、以下そのように表記する。

[6] 前掲、“Carl Diem Sachakten ”p.321

Vortragsreise nach Ostasien（東アジア講演旅行報告書：1955.11.11.-12.22.）によれば、カール・ディームは京都、奈良、大津、広島、八幡、熊本、神戸、大阪、高槻、柏崎、会津若松、福島、横浜、鎌倉、東京などで講演している。森は1955年のこのことについて次の通り回想している。

ディーム先生が日本に来られる前私は、先生について多くを知っていなかった。毎日新聞の大島鎌吉氏から「ドイツでは第二のペスタロッチまたは第二のゲーテといわれている偉い人で、クーベルタンと協力して近代オリンピックを復活させ、また聖火リレーや駅伝競走の提案者でもある」と聞かされた。この先生の講演の通訳を、是が非にも自分で引き受けざるを得ない羽目に陥った。その当時ドイツのマールブルグ大学を卒えてからすでに二十八年が経過していた。[7]

この年（1955年）の12月から、ディーム三度目の来日（東京オリンピックを3年後に控えた1961年4月、日独修好100年を記念しドイツ政府派遣スポーツ使節として東京オリンピック組織委員会が招聘）直前の1961年3月までの足掛け6年に亘って、ディームから森に届けられた書簡は「鹿児島大学山下（森）徳治文書」に19通を確認している。

なお、三度目の日本滞在中、ディームは森徳治からの私的招待を受け、日本がスポーツ少年団の理念型とした、ドイツ・スポーツユーゲントについても講じている。[8]「日本スポーツ少年団」発足の1年前のことである。ディームは成城の森宅も訪れ、両氏は互いに「尊敬しあう間柄」にあったという。[9] 書簡では森自身が述べる通り、余所行き「あなた友達」Sie Freund ではなく、心を許し合っての親しさを意味する「君友達」Du Freund [10] としての交誼が続いた。

２．ディーム講演のインパクト

1955年11月の講演冒頭でディームは次の通り述べた。

近代のスポーツは、遊戯 Spiel 生活の中にある。遊戯は、生物に生活能力を与える自然の道である。動物の遊戯（カール・ディーム博士招聘講演会準備委員会による報告書では「競技」と訳されていたが、森によって訂正されている）本能は、成熟と共に終わる。人間は身体的、精神的存在であるから高齢に至るまで認められる。それは、たとえ身体的発育が終わった後でも、精神上の発達が継続するからである。従って人間の遊戯（同上「競技」）は、身体の運動と活動の要求との結果である。しかしそれらは精神的なものに形成され、そして生活と労働の在り方によってその形態がきまる。人間の競技は、人間の労働と生活方法の種類に関係している。それで競技は謂わば、人間が存在の調和を獲るために、その時々に要求する補いである。[11]

「スポーツ少年団の理念（1964年）」ではその中核を構成する「第2章　スポーツの本質」の冒頭で次のように記された。

スポーツの本質は何かという問に対して、ここに重要なる手掛かりになるものがある。それは、人間の本能ないし衝動として子供に現れる遊戯である。カール･ディームは、「すべてのスポーツは、遊戯としてのシュピール spiel に始まり、競技としての spiel に終わる」と言っている。このことは、諸民族のことばからも説明できる。ドイツ語の spiel が遊戯と競技の意味に使われているように、英語のプレー play も、ロシア語のイグラー Иｒ pà も共に遊戯と競技の意味に使われている。古代民族の祭りにおける奉納競技が、遊びと一体であったことは、われわれにも容易に理解できる。ここでまず次のことを提案しておきたい。

人間の衝動的遊戯性のもつ本質的性格を失っては、い

[7] 森徳治「ディーム先生の想い出」『柏崎体育』1959年6月10日

[8] “Carl Diem Sachakten SACHAKTENVERZEICHNIS” p.323

[9] 森徳治の子息森礼治氏への聞き取り調査（2014年9月1日）による。

[10] 森徳治「ディーム先生の想い出」『柏崎体育』1959年6月10日

[11] Carl Diem, Wessn und Lehre des sports, 1949（邦訳「スポーツの本質・その教え」大島鎌吉訳，1955年）にもこれに関連する記述がある。

かなるスポーツも真のスポーツとしては存在し得ない。

森が「スポーツ少年団の理念」の主要部分冒頭にこれを記した思いの強さは、度重なる草稿の推敲作業から容易に把握できる。ディームによるこの年の講演に強いインパクトを受けたことが想像される。

ディームはこの来日の際、柔道、剣道、弓道などの日本武道とともに、東京で打球の騎馬競技、京都で蹴鞠、鎌倉で流鏑馬、横浜で鷹狩を視察している。[12] 森はこれらにも随行しているが、この時のことを次の通り述懐している。

打球の騎馬競技の中では、非常な速さの中で思考と行動が結びついています。このような運動の状態は、自動的熟練なしにはできません。すべてのスポーツはこの自動的熟練に到達するのを理想としています。ディーム先生は、スポーツの理想の、この生きた姿を打球の騎馬競技の中に見たかったのです。[13]

ディームは1961年に三度目の来日を果たすが、その際の講演概要[14]には「オリンピックの歴史と意義　2．日本のスポーツ」として、これらの競技について記されている。

森は1955年11月講演に関わって、着目すべきもう一つの内容を挙げている。それは「スポーツの生活化」に関わるものである。

スポーツを生活の習慣まで高めうるかが問題である。そのことについてディーム先生は次のように教えてくださる。いかなるスポーツも生活の習慣まで高めなければ役に立たない。そのためには三つの自由が子供に与えられなければならない。[15]

このこと（三つの自由）に関わってディームは講演で次の通り述べている。

スポーツの奨励はすなわち、スポーツの選択、方法の選択、仲間の選択における自由である。[16]

これら三つの条件は1990年代以降興隆をみる「スポーツ生活経営論」の根幹を成す捉え方であるが、1964年の「スポーツ少年団の理念」では次のように整理されている。

スポーツの生活化・習慣化の目的は、一つには、自己の一生を通じての体力および健康管理を自ら体験したスポーツの効用性に関する知識や方法の確立であり、一つには、スポーツ実践を通じての望ましい人格形成である。（中略）スポーツの生活化は、自己の生涯の生活の中にスポーツの肯定的な効果を生かし続けることである。そのためには、スポーツを継続的実践する機会がなければならない。スポーツ少年団の目途するところも、ここにもある。従って、スポーツ少年団にとどまらず、やがてはスポーツ成年団に育つべき運命を背負っていると言わねばならない。（p.20）

スポーツを通じての人間形成への道はけわしく、ややもすれば無統制、無企画なスポーツ・トレーニングに陥り勝ちである。スポーツ生活を、完全な姿で行う場においてのみ、スポーツは人間形成の強力な手法となる。（p.24）（傍点は引用者）

なお、ディームは上記について講ずる中で、「運動生活」、「スポーツ生活」、及び次項において検討される「自己教育力」概念に触れている。[17] それらはディームによるスポーツ思想・スポーツ教育論の鍵概念にもなっているが、森徳治の手を介して「スポーツ少年団の理念」において実体化された。

３.「スポーツ少年団の理念」にみるカール・ディー

[12] Carl Diem, Bericht Über die Vortragsreise nach Ostasien, 1955, p.7

[13] 前掲、「ディーム先生の想い出」1959年6月10日

[14] 財団法人日本体育協会・オリンピック東京大会組織委員会編、『カール・ディーム博士講演概要』1961年、p.12

[15] 森徳治「ディーム先生の想い出」『柏崎体育』1959年7月10日

[16] カール・ディーム博士招聘講演会準備委員会編（森徳治翻訳）、『カール・ディーム博士講演集』、1955年11月、p.23

[17] 前掲、『カール・ディーム博士講演集』、p.26

ムと森徳治の共鳴関係

⑴　カール・ディームの「自己教育力」概念と森徳治の「人間の自己形成」概念

森は自らの教育思想を象徴する「自ら生い立つ」という表現をしばしば用いている。「スポーツ少年団の理念」において森は「自己形成」概念を多用し、「スポーツによる人間の自己形成」を強調した。

一方、カール・ディームの言説にはしばしば「自己教育力」概念が登場する。

武隈・前田（2015）は、カール・ディームのいう「自己教育力」について検討している。[18] それは概ね次のような言説についてである。

①スポーツの自己教育力を教育目的から決定された人間的教育に向けなければならない。②少年は自分自身の体育教師として、自分に適した独自の練習計画が立てられるようにならなければならない。その経験は自己教育及び自分で自分の意志を鍛えるという目標を達成したと言いうる。③スポーツは自由への能力源であり、自己教育、自己完成への登竜門であることを要求する。[19] ④青少年はスポーツマン的で自由な実践者同士の共同生活の中で、内面にある自己教育力が発揮されてくる。[20]

こうしたディームの言説はどのように解釈され、また昇華され「スポーツ少年団の理念」に盛り込まれたのか。その文言の中から痕跡を探る。[21]

①人間が自分の可能性を育てていく中で最大のものは人間の自己形成である。（p.4）②スポーツによる人間の自己形成は自分自身の実体となる自然の営みである。（p.4）③スポーツ活動の中で、日常生活の慣習や拘束からも解放され、自らを人間的なるものへ形成していく。（p.7）④スポーツマンは自己の可能性を最大限度に発揮していくそこに、自己を新しい人間に形成する機会が生まれる。（p.8）⑤スポーツは目標実現のための努力を重ねるという自己形成の態度に連がるものである。（p.15）⑥スポーツのもつ文化的機能による精神的宗教的陶冶の人間への定着は、一時的ではなく永続的である。（p.18 ）⑦スポーツの生活化は、自己の生涯の生活の中にスポーツの肯定的な効果を生かし続けることである。（p.18）

「スポーツ少年団の理念」における教育思想に凝縮されたのは、スポーツの有する自己形成機能、より厳密にはスポーツが究極的には青少年の内側にある自己教育力を引き出すことを示したところにある。森の言う「自ら生い立つ」ことの意味と機能を「スポーツ文化」が内包することを示唆するものと言えよう。この時代、「スポーツによる教育」の論理的視座をここまで明確に打ち出したものはなかった。

⑵「スポーツ少年団の理念」に照射されるカール・ディームのスポーツ思想

「スポーツ少年団の理念」は「第一章　平和への二つの道」、「第二章　スポーツの本質」、「第三章　スポーツの効果」、「第四章　日本スポーツ少年団の指導原理」、「第五章　時代の要求する少年像」からなる。これらのうち、「第二章　スポーツの本質」及び「第三章　スポーツの効果」はカール・ディームの主著 Wessn und Lehre des sports, 1949（邦訳「スポーツの本質・その教え」大島鎌吉訳，1955 年）に負うところが大きい。

「第二章　スポーツの本質」は同書の「スポーツの本質」（邦訳 13-54 頁）、「第三章　スポーツの効果」は同書の「スポーツの効果」（邦訳 69-79 頁）の記述内容を色濃く反映させている。

これらの記述内容は多岐にわたるが、中でも「第三章　スポーツの効果」の「一、スポーツの身体的効果」の項で記述される「自動的熟練」の概念

[18] 前掲、「日本スポーツ少年団の哲理・理念」における教育思想の形成過程、p.64

[19] 加藤元和、ドイツ国民スポーツの使徒　ディーム、（岸野雄三他編、『体育・スポーツ人物思想史』、不味堂出版、1979年）、Pp.543-557

[20] 前掲，ドイツ国民スポーツの使徒　ディーム，pp.557-558

[21] 前掲、「日本スポーツ少年団の哲理・理念」における教育思想の形成過程、p.64に加筆

が注目される。

生涯の活動力の基礎となる体力の増進のためにも、無意識の中にも正しく動作できる反射的運動獲得のためにも、いくつかの種目の基礎練習を修練することは必要である。またスポーツ自身の高度の発達と考えられる自動的熟練のためにも、この少年期のスポーツ練習は、それへのかけ替えのない時期である。(pp.12-13)（傍点は引用者）

森はドイツ・ハンブルグで 1957 年 7 月 26 日から 28 日に開催された第 18 回ドイツスポーツ医学会におけるカール・ディームの講演原稿[22]を入手し、とりわけ「自動熟練期」における運動習得に着目した。森は別稿でも、このことに論及している。[23]

（ディーム）先生が講演の中で、かかる理想境に到達する基礎時代としての自動的熟練期について説かれていて、それが青少年の体育上極めて重要であると思ったからである。先生によれば、子供は七、八才から十一、二才が自動的熟練期に当る。この時期にスポーツを始めないと、高度の自動的熟練の域に達しない。十五才ではすでに遅く、十八才ではもう不可能である。

「自動的熟練期」の考え方は、森がディームから得た知見の中でも、とりわけ思い入れの深いものと考えることができる。スポーツ科学のその後の発展は、こうした概念構成についても熟度を高めている。しかしながら、日本のスポーツ界・教育界にこのような視座を持ち込んだことは、一つの画期と言うことができよう。

⑶　スポーツとユーモア

「スポーツ少年団の理念」においては若干異彩を放つ記述がある。「スポーツとユーモア」に関わるものである。しかしこれも、ディームの影響なしとしない。

スポーツ実践による誤謬は、その運動がスポーツの本質である「よろこび」や「楽しみ」あるいは「ユーモア」を忘れ去っていたからである。日本スポーツ少年団が、真の意味で日本の民族意識の昂揚と、国際的協調性を少年・少女の心身の健全化から斉らそうとする時、忘れてはならないことは、その指導者等の脳裏に、常に、このスポーツの属性である「笑いとユーモア」、つまり、真の自由がひそむ事を明記しておくことである。緊張したままの、また張りつめられた糸は、やがては切れる。（中略）　スポーツ実践の場が、指導理念として、また最も有効な手段としての「真の自由」を忘れない限り、それは無限の可能性が展開されると言ってもよいであろう。戒律主義や鍛錬主義の中に、この「ユーモア」が消え去るとき、スポーツ実践は全く容易に、専横的指導者のいけにえに化するのである。(p.21)

ディームは主著の中で次の通り述べる。

スポーツ教師は、楽天的な性格を持ち、本心から生活について肯定的であり、新鮮さがほど走っていなければならない。しかし、底抜けのドンチャン騒ぎを好まず、むしろ、人生に起る事物については、誰よりも男らしい冷静さでこれを眺める実務家でなくてはならない。（中略）　賊しさと妨害に対しては圧倒的にこれにうち勝つ術を知らねばならない。

これに対抗する手段はユーモアである。彼は、邪悪の中に善意を、悲しみの中に慰めを、怒りの中に協和を、骨折りの中に微笑を見つけるのである。（中略）　ユーモアは彼の創造する心とともにあるものである。[24]

ディームはここでゲーテの「心の中にユーモアを持たぬ人は第一線の人ではない」を引く。本稿冒頭の「第二のゲーテ」の面目躍如とも言えようか。森はスポーツ科学者・オーガナイザーとしての実力とともに、ディームの文学や哲学の造詣に傾倒していったものと推察される。

---

[22] Carl Diem “Sport und Alter” 18.Deutcher Sportärzte-Kongress 1957,pp.1-25

[23] 前掲、「ディーム先生の想い出」1959年6月10日

[24] Carl Diem, Wessn und Lehre des sports, 1949（ 邦訳「スポーツの本質・その教え」大島鎌吉訳，1955年）、p.183

小括及び今後の課題

本稿では、カール・ディームと森徳治の文書を中心に、両者の影響過程を経たスポーツ教育思想の検討を試みた。その一部には仮説として今後検証されなければならないものが含まれる。ただ前稿[25]及び本稿の検討内容からかなりの確度で指摘できることは、森とディームの共鳴関係がなければスポーツ組織理念としての「スポーツ少年団の理念」は、これとかなり異なるものになったであろうことである。

しかしながらこの共鳴関係の検討も、森側から得た文書が中心であり、今後、ディーム側からの文書を照らし合わせなければ、十分な解明とはいいがたい。

“Carl Diem Sachakten SACHAKTENVERZEICHNIS”はこのことに有益なディーム側の文書ファイルが存在することを示している。そのための現地調査が不可欠となる。また、カール・ディームのアーカイブ CuLDA には本研究の趣旨に叶った相当程度の文書が存在することがわかっている。これらの渉猟も欠かせない。

カール・ディームから森徳治に送られた 1955 年 12 月 6 日付から 1961 年 3 月 10 日付まで 19 の書簡が山下（森）徳治文書に確認されている。その内容はフィリピン、インド、米国、オーストラリアなどの招待講演や滞在に関するもの、医師赤池曜との交流に関するもの、養護施設への訪問、日本の流鏑馬や（ディーム没後となった）東京五輪（1964 年）への思い、来日時の東京への到着時刻を告げるものなど多岐に亘る。ケルンスポーツ大学に残存する森側からの文書と合わせて、両者の交誼関係をさらに洗い出す必要があるものと思われる。

また、ケルンスポーツ大学オリンピック研究センターが保有する、カール・ディームが日本のスポーツ教育や日本のスポーツ界に及ぼした影響について検証するための文書の解析という課題も残されている。

なお、本稿で着目した「自己形成」及び「スポーツ生活」概念に関わって、特に 1930 年代以降の日本における人間形成論や「生活（教育）」論争とドイツにおけるこれらに関わる史的な比較検討が必要になるものと考えられる。森・ディーム両者の影響過程の検証には、両国におけるこれらについての共通性や差異を背景に置く必要があると考えられるからである。

（本研究は平成 27 年度科学研究費助成事業（基盤研究（C）（一般）：課題番号 15K04241）による助成金によって実施された。）

[25] 前掲、「日本スポーツ少年団の哲理・理念」における教育思想の形成過程、pp.59-69